

昆虫が減っている

網走市 法師人 春輝

6月の中旬から、10月中旬まで4カ月間に亘り、1週間に1回のペースで漆山に漆掻きに出かけています。網走の自宅から東へ約25kmの山里地区にある岩手県から取り寄せた漆を植林した山です。四駆でなければ無理な急斜面の林道を直登すると1ha程の開けた場所に樹齢20～25年のウルシが400本程育っています。自然林に囲まれていて時々熊出没注意の看板が立つ所です。

さて、そんな4カ月間の山仕事で特に気になることがありました。それは令和元年の季節、極めて昆虫が少ない様に感じたこと、いや少なかったのです。漆山は人の手で保全されていますが、今迄は普通に虫たちはいたように思います。

春はエゾハルゼミに始まり、夏はコエゾゼミ、ジャノメチョウ、オオヒカゲ、ヒョウモンの仲間、トンボはオニヤンマが上がって来たり、甲虫類はカナブン、カミキリ虫の仲間等々、また漆の葉を食害するクスサンやスズメバチなども頻繁にやって来ます。山菜が採れる初夏、晴天の日は、エゾハルゼミが一斉に鳴きだし、山全体が躍動感に満ち溢れます。令和の始まりは5月下旬に気温が30度を超えたため、この間に羽化したセミはラッキーでした。

しかしこの年、オホーツクの短い夏の間、虫たちは一体どこに行ったのかと思う位いなかったのです。キリギリスひとつとっても山へ向かう草むらから鳴き声は聞かず仕舞いでした。秋になると毎年のように向いの土手のヨモギの中で鳴いていたカンタンの声もとうとう聞けませんでした。

一方、漆掻きにとって一番危険なスズメバチ達はいつも通りの来襲、それでも多くありません。



やぶ蚊も少なかったように思います。漆の葉が好物のヤママユガ科のクスサンという蛾がいます。終齢期幼虫は薄緑色の結構可愛い毛虫ですが、毎年うるさい位木に登って来ます。これも僅かしか見ません。カナブンなど甲虫類も少なかったように思います。漆山全体がひっそりと静まり返り、遠くから聞こえるキジバトの声だけが物悲しさを際立て、寂しい山の姿が印象に残りました。

写真：山繭、クスサンの成虫（羽化直後）

この年は特に少なかったことを気にしつつ山仕事を終え、数週間後、何気に付けていたテレビのNHK ニュースから、日本の蝶類が大幅に減少していると聞こえて来ました。特にミヤマカラスアゲハは1年で平均34%も急減したと言います。イチモンジセセリは確か7%位減とのことで、自分の感覚と報道がピッタリ当たっていて驚愕したことを覚えています。やはり、全国ベースで減少していたのです。いや、後で解りましたが世界的規模で昆虫の減少が起きていたのです。

一方、モンシロチョウはうちの家庭菜園のブロッコリーに卵を産み付けるために毎日のように来ていました。しかし、考えてみればうちの庭も虫達が好む花も無く、野菜と木だけのつまらない庭だということに気付いたのです。カラスアゲハはもとより、セセリチョウ、アキアカネも見えていません。私が子供の頃住んでいた北見の「高台」にあった家の庭は、グラジオラスやルピナス、ギボウシ、ユリ、ケシの仲間、マーガレットの群落、名前が解らない色取り取りの花々が吸蜜植物として蝶や虫たちを引付けていました。また馬鈴薯、ゴボウ、トウキビを始め数々の野菜たち、杏子や

梨などの果樹、そしてイワギキョウなど高山植物、シクナゲなどの庭木たち等々、小さな生態系を維持していたような気がします。

花の周りはハナムグリやテントウムシなどの甲虫類、素早く飛ぶセセリチョウ、ハチドリの様なホバリングをして花から花へ吸蜜するスズメガの仲間も良く来ていました。またカラスアゲハのチョウ道にもなっていました。

夏が終わる頃には物置の壁に目まぐるしい数のアキアカネが止まり、深まる秋の光景として目に焼き付いていました。

昆虫が減少している実感を家人と話していた矢先、暮れ押し迫る頃、偶然にも昆虫が危機的状況にあることを取り上げた番組がNHKから放送されました。内容はこうです。ドイツでは昆虫全体が27年間で76%減少した、シドニー大学の教授の発表は地球上の昆虫は毎年2.5%減少している、日本ではアキアカネが99%減少した、植物の80%は昆虫に助けられていてこれが無くなることは食物連鎖の崩壊につながる、これらは大規模農業、都市化、地球温暖化が原因・・・というものです。この放送を見て地球上から昆虫が姿を消すかもしれないという危機感が更に押し迫ってきました。

里山が少なくなり、山は植林となり雑木林の減少はミヤマカラスアゲハの食草であるミカン科のキハダの減少にも関係していると思います。ミドリシジミやセセリチョウ、タテハ類の生息環境にあった北見の「氷池」周辺は住宅地になり、ミズナラやカシワの広葉樹林も見られなくなっていました。

環境破壊の一言で片づけるのは乱暴な言い方かも知れませんが、確かに都市化の進展と里山の減少、荒廃地の増加の影響はあると思います。

農村部を見てもTPPを始めとする貿易自由化の影響が小規模農家の廃業を余儀なくし、里山や屋敷林が消え耕作放棄地とともに農村が荒廃していく、小規模農業の維持を困難化させ、TPPに打ち勝つ大型経営体の推奨を大義名分とした農業政策が本来の農業の持つ多面的機能や生態系維持に少なからずとも影響を与えている実態も垣間見えてきました。

また地球温暖化の問題も避けて通ることは出来ません。地球温暖化のスピードに生物の移動が付いていけず絶滅の危険性が出ているという報告もあります。人類が地球規模の見地から生物多様性に重きを置き、国連が提唱しているSDGs（持続可能な開発目標）の理念を本当に実践していかなければ、手遅れになることは目に見えていると思います。

では、私個人としては何をなすべきか？

一つは、野菜ばかりを優先せず昆虫が好きそうな花を増やす。二つ目はブロッコリーに卵を産み付けに来るモンシロチョウをなるべく追い払わない。三つ目はボラレン活動の中で注意喚起をする。など・・・（ちょっと小さいか？）他に個人に出来ることがあれば教えて下さい。

最後に今年は虫たちが沢山、山や里、屋敷回りに集まってくれること、併せて皆さん方にとって良い年になります様ご祈念し終わります。

(参考) ・NHK 2019.12.28 放送「昆虫やばいぜ」
・「北見の蝶」木村辰正 著 北見育委市教員会（北網圏北見文化センター）発行
・「チョウと私」進 基 著 北網圏北見文化センター協力会発行

◆本稿は、オホーツク支部会報「流水 第20号」（2020初春号）から、書式調製し、転載したものです。